

大町桂月

夏目漱石論

夏目漱石論

絶代の奇才と言うべきかな、大学を出でて、田舎の中学教員となりおりし間は、日本派の一俳人として、一分の人に知られしのみなり、さまで奇とするには足らざりしなり。進んで高等学校の教員となりしも、これは鰻上りというものにて、さまで奇とするには足らず。留学を命ぜられ、歸りて、大学の教員となりしは、秀才には相違なけれども、他にその類も少なからざることなれば、さまで奇とするには足らず。一朝「我輩は猫である」を著わすに至りて、夏目漱石の奇才、ここに始めて穎脱えいだつせ

り。当にその作が奇抜なるのみならず、大学教員にして、しかも四十歳近くになりて、始めて小説を草し、しかもその小説が文壇を風靡するといふ事実が奇抜なり。やがて、大学教員の職をなげうつこと敝履のごとく、甘んじて、一生を一枝の筆に托するに至りては、愈いよいよ奇抜なり。つらつら漱石の学や文や人格やを察するに、気骨あるの士なること、明治の文壇、実に空前なり。日本派の俳壇にありて、正岡子規は、趣味ひろく、才大なる点に於いて、大将株の価値あり。内藤鳴雪は風韻高き点に於いて、俳壇の仙なり。漱石は、奇抜を以て、一頭地を抜く。

他の諸氏は、凡骨もしくは、小才子の徒、多く言うに足らず。漱石は、滑稽をも兼ねたり。「かみなりのづに乗り過ぎて落ちにけり」は、まだ月並みの痕跡あれど「某は雀にて候案山子殿」などに至りては、滑稽の妙をきわめて、よく漱石一家の特色を發揮せるものなり。

はじめ、帝国文学に、「倫敦塔」出ずるや、われ激賞して曰く、帝国文学空前の美文なりと。その後「我輩は猫である」の上巻出ずるや、われ少しくこれを抑えたり。抑えたるは、その大成を期したるなり。飲酒、道楽、社交、旅行等の注文も、この意に外ならず。しかるに、中

卷に至りては、苦沙彌先生、二杯の晩酌のところを四杯まで飲み過ぎす。細君苦々しき顔をなす。先生曰く「桂月が飲めと勧めたり。」「桂月とは何ぞ」「さすがの桂月も、細君に逢つては、一門の価値も無し。桂月は現今一流の批評家なり。その桂月の言う事故、よき事なり」といえば、「桂月だつて、梅月だつて、よけいなお世話なり」という。「酒のみならず、交際をして、道楽をして、旅行をしろとすすめたり。」「なお悪きにあらずや。」と、細君柳眉をさかだつるに至りて、われ覚えぬ案を拍ちぬ。謗劣、余の如きものの愚評が、作家に対して、ここまで

反応があるかと思えば、大いに張合があるというものなり。漱石は、なお余の言を気にせしと見えて、他の処に於いて、「桂月は主人の事を釋気があると言っている」と記せり。問うに落ちずして、語るに落つ。そんな事言うが、即ち釋気なり。しかし、冷やかすことは、さて措き、上巻の三四倍大のものにしたしと注文せしに、うれしや、中巻出でたり、下巻出でたり。容量に於いても大作の資格を備うるものとなりたり。

ここに、余は、さきに、上巻に対して、頌よりも、規を以てして、抑えたる批評を取り消して、言わんとす、

一九の「膝栗毛」三馬の「浮世風呂」が傑作なる以上は、「我輩は猫である」は、ある点に於いては、たしかに、それ以上の傑作。空前の作なり。

写生文は、写生の必要あり。画家にモデルの必要あらば、「我輩は猫である」も、モデルあるべし。漱石のとなりもあらわれているなるべし。されど、それよりも、直接世にあらわれたる事実について吟味する方が、早手回しなり。漱石の朝日新聞社に入るや、入社を辞を草したり。「大学は我を冷遇したり。年俸僅々八百円、衣食にも事欠く。故に我を優遇する新聞社に入りたり。」と

の言あり。その学ぶ所が英学故、知らず知らず英国の氣風にかぶれて、それを当然の事と思ふかも知れず、又天真爛漫、己を伴いっわらぬつもりかも知れねど、余を以てみれば、例の穉氣むしろ愛すべき点もあれど、立つ鳥、水を濁さずということを解せざるなり。大学の諸公、多くはみな駿馬なり。しかも槽櫪の間に一生を送る駿馬なり。即ち官臭を喜ぶ人なり。漱石は、官学的臭氣を帯びず、所謂天馬覇すべからず底の人なり。冷遇に腹立てて、去るなら去るで、大いに好し。されど、行きがけの駄賃、大学の悪口言うの必要、いづくにか在る。「文学論」の

梓に上るや漱石大いに怒り、校正者をして謝罪状を新聞に出さしめたり。更に活版屋と争そえり。その活版屋と争いしは、愚のようなれども、活版屋を警戒して、出版上に利益を与えたりとすれば、大愚と云いて可なり。されど、校正者の謝罪広告に至りては、全く痴愚なり。私の区別を知らざるなり。校正者粗漏ならば、私に於いては、大いに校正者を叱るべし。されど、公に於いては、責を引き、自ら謝罪せざるべからず。元来、自著を自ら校正せぬということは、読者に対して、不忠実きわまることなり。されど、自ら信用する人ならば、これに托

するも、止むを得ざる場合もあるべし。その場合には、校正の誤謬は、校正者の罪にあらずして、漱石の罪なり。その罪を校正者にのみ嫁して、己ひとり、いい子とならんとするは、余りに得手勝手なる我儘者なり、一寸気が利いて、大いに間が抜けたり。所謂頭かくして、尻隠さざるの類なり。腹に悪意あるにあらず、罪なし、無邪気なり。釋氣、むしろ愛すべきなり。

事実上の漱石、既に斯く滑稽を帯びたり。これを「我輩は猫である」に凝するに、ハハア、出ているは、でているは。その為に、「我輩は猫である」に、一種の滑稽

を添えたり。大学の薄遇を怒り、校正者の粗漏を怒り、活版屋の不埒を怒るの漱石は、苦沙彌となりて、金田夫人の鼻の大なるが、癩にさわりて怒りたり。墻外で、サベージ、チーと悪口言われて、怒りて飛び出したり。湯屋にて学生と喧嘩したり。野球の丸ボールを投げ込まれて、怒りて学生を捕えたり。校長を呼びたり、その結果、始めの怒りも何処へやら、竜頭蛇尾に収まりて、門が鳴る。御免、丸ボールを拾わして下さいと、頻煩に学生の入り来るとが増したるだけにて、丸ボールの飛来は、依然としてもとの如きなり。苦沙彌先生癩癩を起こししは、右にあげた

る場合のみにて、それも至つて無邪気なる、罪の無き怒りなり。平生は、洒落なり、飄逸なり。白き鼻毛を抜き、珍しがりて、うえたてて、面白がるなり。細君来て、家計の不足を訴うれば、その鼻毛にて、追っ払いて、うれしがるなり。気が利いたようにて間が抜け、間抜けたようにて、気がきき、機知にとみ、想像力にも富めり。盗賊にもものを取られても、くやしがらず。その盗まれたる品物が戻ると聞きても、さまで、うれしがりもせず。友に對しても、来る者は拒まず、去る者は追わず。細君の言うが如く、巡查を恐れ敬うは、内氣にして、真面目に

して、臆病なればなり。我家に入りたる盜賊を、それとは知らずに、刑事巡査と思ひあやまりて、慇懃にこれに頭を下げたるは頗る滑稽なり。迷亭に注意せられても、なお悟らずに、その非を通すは、ますます滑稽なり。内氣にして臆病なるは、天才者の一の資格なり。しやあしやあと蛙の画をするものに、到底大なる発達なし。姪の少女、小慧なり。苦沙彌先生のあまのじやくなるとを看破せり。買つてくれと云えば、買つてくれず、いらないと云えば、買つてくれるという秘訣を知りて、いらないと云いて、蝙蝠傘を買ってもらえり。得々として、これ

を叔母に語る。そんなら返せと、苦沙彌先生に言われて、忽ち泣き出すなど、目の前に見るようなり。迷亭も、寒月も、越智東風も、多々良三平も、いずれもみな苦沙彌先生の変形に過ぎず。迷亭は洒落のようなれど、小心なり、うそをつけど、悪意は無し、パナマ帽の説明をなし、蕎麦の食い方を説明するなど、馬鹿のようなれど、馬鹿にはあらず、寒月は金田令嬢にほれて、吾妻橋より身を投ずるまでの馬鹿者なれど、橋の下にはあらず、橋の上に身をなげたる利口者なり。蛙の目玉を研究し、博士論文を草し、博士となりて、金田の女婿とならんと思ふま

での馬鹿者かと思えば、いつの間にやら、国より細君をつれて来たる利口者なり。越智東風は我が愛する美人が他に嫁すると聞きて、やきもちを焼かず、失恋して、華巖滝に赴きもせず、喜んで祝いの歌をつくるまでに酒々落々たり。徹頭徹尾、滑稽に富みて、その滑稽には、機智あり、警句あり、いやみ無く、くすぐり無し。諷刺は少なし。諷刺の出来るほどの度量なき人なり。否、諷刺の出来るほどの悪人に非らざるなり。直裁にして、天真爛漫、いつわらず、ぶらず、銜わずして、気品自ら高し。終に猫がビールに酔いて、甕中に落ち、脱するに路

なきを知りて、未練も言わず、愚痴もこぼさず、泰然として死するに至りて、漱石の面目、所謂画龍に睛を点ずるの趣あり。漱石の作、冷ややかなるようなれど、真に冷ややかなるに非ず。腹には、万斛ばんこくの涙ある人なり。されど、自ら修養する所ふかく、理性も発達せり。生死得喪の上に超脱す、この猫の最期と中巻の序とを対照すれば、面白かるべし。留学中、正岡子規が重病の苦状を書きたる手紙を送りければ、長々と返書をおくれり。子規それを面白がりて、今一度おこしてくれと、あわれな事を言い来たれり。されど、我は我の仕事あるを以て、返

書をおくらざりき。子規むなしく死せり。一寸、この事を聞かば、人或いは不人情と思ふべし。然れども不人情には非ず。漱石の所謂非人情なり。漱石は善人なり。涙ある人なり。されど、自ら生死得喪の上に超脱す。子規の病苦を気の毒とは云えど、達人にありては、一死もとより大事件にはあらざるなり。一般の俗人なら、いざ知らず。正岡子規ともあるべき人なら、亦然るべき筈なり。根憊こんたいにこの悟脱あり、故に猫の最期も見事なり。漱石自身こゝろの最後まで、亦同じく見事なるべきなり。明治の文壇、われ漱石に於いて、高士の倂を見る。

滑稽も涙ある人の滑稽にて、はじめて軽薄の気紛々と
 して近づくべからず、「我輩は猫である」一篇、一寸冷
 かなようなれども、徹頭徹尾、面白可笑しく読まるるは、
 作者その人の腹に涙あるが故なり、又漱石の人格の高き
 が故なり。唯漱石は、事実上にも、下らぬ事に癩癩を起
 こし、それが作にあらわれて、自然の滑稽となる。釋氣
 と云えば、釋氣なれども、むしろ愛すべきなり。世もし
 単に漱石の滑稽のみを味わい、警句のみを味わうものあ
 らば、これよく漱石の作を読む者と云うべからず。草枕
 の主人公が陶淵明の「採菊東籬下、
きくをとるとうりのもと
 悠ゆうぜんとしてなんざんをみる然見南山」

を激賞したるは、やがてこれ漱石の趣味なり。漱石は英文学に精通し、哲学的頭脳を有し、西洋の新知識に富めども、根本は、漢詩、俳句、禪、武士道などにふくまれたる気品を身解したる人なるべし、淵明もし小説を作らば、漱石に似たものが出来るべし。雪舟もし小説を作らば、やはり漱石に似たものが出来るべし。社会の趣味墮落し、浮薄にして、唯、新を追い、芸術の徒に西洋の糟粕を嘗めて得々たる世の中は、雪舟、探幽などの名画は、どしどし西洋に飛び出しつつあるなり。気品ということを解せざる者は、去って自然派の小説を読め、自然派の

小説は、また独特の別趣味あるなり。氣品を解するもの、漱石の小説を読まば、塵外の仙境に遊びたる心地すべきなり。この点に於いて、明治の軽文学上、漱石が独歩なり。

さらば、漱石は、氣品の極に達し居るかと云うに、余は、否と答ふべし。味噌の味噌くささは、眞の味噌に非ずと云いけん、氣品の氣くささも、まだ上乘の氣品にはあらざるなり。写生文と題する論文の中に、漱石は、写生文の要を説きて、写生文家の社会人生に対するは、親の子に対するが如しと云えり。これだけなら大いに好し。

然るに、その理由を問えば、子が犬に吠えられて、あわててにげて、菓子を落として、泣いたからとて、親はその子と同じく泣く能わざるなりと云う。漱石のまだ気品くささも、ここのなり。その作の冷ややかに見ゆるも、ここのなり。子と同じ心になりて、子と共に遊び、子と共に鬼戯もなし、子と共に笑い、子と共に泣き、しばらく、小我を没してこそ、まことの親なれ。気品も、ここに至りて、渾然たる大気品なり。潔癖にして理智のすぐれたる漱石には、無理なる注文かも知れざれども、漱石もしその大を望まば、自ら力めてその理智をくりますべし、

愚になるの趣を解すべし。西園寺候が聡明純潔の資を以て、豺狼のよりあいのような政界に立ち、政友党の総理となり、内閣総理大臣となれるは、これを能くせるによるなり。書を読みおりては、漱石の理智は、益長ずべし。しばらく書卷を擲ち、世の愚物、俗物に伍して、外部の圭角を去れば、それでよき事なり。余の飲酒、道楽、社交、旅行云々は、要するに、愚になれとの事なり。必ずしも小説に酒を描け、道楽を描けとの事にはあらざるなり。

単に気品のみならば、明治の世といえども、仏に名僧

あるべく、野に高士あるべし。漱石のみに限らざるなり。芸術上の手腕として、漱石に多とすべきは、その独創力なり。独創力なき気品は、気品なれども、陳腐となるべし。漱石は奇才なり。月並みを嫌い、常套を忌む。杜甫は、「語不レ驚レ人死不レ体」と云いたるが、漱石にも、この概あり。何事も古人、もしくは西人の糟粕を嘗めず。今の自然派の作家が、西洋の自然派の糟粕を嘗むるが如きは、漱石の蛇蝎視する所なるべし。漱石はその小説のみならず、その文章にまで、自家の新機軸を出して、すべて所謂夏目式なり。これ芸術上の一大用件なり。これ

を欠ぎては、大家と云うべからず。大家と云うべからざるのみならず、芸術上の生命なきなり。トルストイを真似て、トルストイまでに至り、モーパッサンを真似て、モーパッサンまでに至りたればとて、一時の愛嬌にはなれ、こけおどしにはなれ、芸術史上、何等存在の価値なきなり。「我輩は猫である」は、たしかに一種の夏目式なり。所謂非人情小説の「草枕」は、猫とは、とびはなれて、亦一種の夏目式なり。「二百十日」も「坊ちゃん」も、みな夏目式なり。短篇にいたるまで、それぞれ特色あり。「一夜」は、漱石が自ら「我輩は猫である」の中

に、「先達ても、私の友人で送籍という男が、一夜という短篇を書きました。誰が読んでも朦朧として、取り留めがつかないので、当人に逢って、篤と主意のある所を糺して見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云って、取り合わないのです。全くその辺が詩人の特色かと思えます」と云えるが如く、まことに禅問答みたようにて、とんと分かりかねるものなるが、とにかく、一種の特色あり。その他、幻影の盾、薙露行、趣味の遺伝、琴の空音など、いずれも夏目式なるが、一篇は一篇の特色ありて、似寄ったものなく、いよいよ出でて、いよいよ

よ新、いよいよ奇、以て才の大なるを知るべし。

かく小説その物が世に夏目式と云わるるが、文章も亦夏目式と云わる。形容、譬喩など、ありふれた成句は、一つも用いず。皆自ら新に工夫して、しかも妥帖なり。毫も生硬ならず。警句続出、応接に違あらず。文才にも長けたる人なるかな。文は長けれども、句は短く、従つて力あり。断岸絶壁相連なりて、はきはきしておりて、しかも委曲をつくし、複雑なることを明白に描き出して、所謂痒いところに手の届くとは、漱石の文章の事なり。対話のうけ具合も、今の小説家の中に手は、上出来の方

なり。西洋の新知识を加えて、漢文、漢詩、俳句の素養も深かるべし。和歌和文の素養はあまり見えざるようなれども、文法語格などの間違ひは、ほとんど無くして、文章家としても、一種の異彩を放てる名文家たるを失わず。漱石は新を好み、奇を愛すれども、妄りに小才を恃みて格を破りたるに非ず。十分古文学の素養ありて、一旦格に入りて、そして後、格を出でたるなり。故に前人を襲踏せずして、自ら法度あるなり。

今、朝日新聞に出しつつある「虞美人草」は、未完なれば、しばらく言わざるべし。在来の作は、「我輩は猫

である」の外は、「野分」一篇を除きては、漾虚集と鶉籠とにまとまれり。「我輩は猫である」は、漱石の名を成さしめたるだけありて、どうしても、第一の傑作なり。これに次ぎて、「草枕」と「坊ちゃん」とが見るべし。人或いは漱石が小説の伎倆を疑うものあり。されど、坊ちゃんを書ければ、諸説の伎倆は、十分なり。坊ちゃんは、よく躍動す。所謂小説の格にはまりたるものなり。こうまで坊ちゃんを躍動させるには、作者自身を描けるにあらずんば、出来ざることなり。当年、「油地獄」は、斎藤緑雨の傑作と称せられたるものなるが、極めて内氣

なる、恥ずかしがりの、初心なる主人公は、緑雨自身なりとすれば、我儘で、気が勝ちて、負嫌いで、しかも無邪気なる坊ちやんは、漱石自身なるべし。「草枕」はこれと異なりて、格を出でたる、所謂非人情小説なり。文最も美なり。警句最も多し。漱石自身からも説明せる如く、美を美として描ける小説なり。非人情の画家、温泉場に赴きて、非人情の美人に遭い、これを描かんとすれど、何処か足らぬ処あり。されど、ここぞとつきとめること出来ざりしに、停車場裡、人を送りし時、その美人の顔に、「憐れ」が浮かび出でしを見て、これだこれ

だ、これで画になると喜びたりと云うだけにて、筋を云えば、極簡単なれども、筆底花を生じ、描写神に入り、美をきわめ、妍をつくし、人をして画裡に逍遙するの思ひあらしむ。その美人の面に「憐れ」を欠きて、画にならざるを知るの漱石は、我が作にも、同じく「憐れ」を欠くの不可なるを知らざるだけの明あるべし。これ「我輩は猫である」の成れる所以なり。されど、人もみな下らぬものと思うなるべし。これ「憐れ」を欠ける所以なり。

余はおもに芸術家としての漱石を見たり。即ち漱石の

軽文学のみを見たり。漱石には「文学論」の大著あり。

「文芸の哲学的価値」という長論文もあり。その他にも論文ありて、硬文学に於いても、亦有力の士なり。漱石の如き作家が、新聞小説の中にあるは、はきだめの鶴とは言わば、或いは誇張に失するかも知れず。安普請の小借家の金屏風とでも言わんか。新聞に小説を草してより未だ久しからざるに、読者の評判、はや、はじめのようにもなく、毀誉相半せるが如し。「我輩は猫である」に、軽快なる滑稽のみを味わいて、漱石が新機軸の気品を味わざるの致す所たらずんばあらざるなり。

日本文学電子図書館

我が半生の筆

著 者：大町桂月

制作者：宮澤一郎

出版社：廣文堂書店

大正4年1月15日 印刷

大正4年1月20日 発行

日本文学電子図書館